

エイズ治療拠点病院医療従事者

海外実地研修報告書

1 研修参加者

所属・職名：浜松医療センター 感染症科
氏 名：島谷倫次

2 研修日程・コース

日 程：2012/10/6～10/19
コース名：エイズ治療拠点病院 医療従事者海外実地研修
サンフランシスコ 医師等コース

3 研修の内容

HIV診療医師

・主にHomelessのHIV患者の診療に当たっているBarry Zevin先生からのレクチャー。複雑な合併症・背景をもつ患者の診療について。HCVとの共感染が非常に問題になってきているが、HCV治療については専門医に相談しながら、Zevin先生自体が行っている、との事であった。時間の都合上、診察風景の見学は出来なかった。

・OaklandのHighland HospitalでHIV診療を行っているHoward Edelstein先生とのディスカッションや診療風景の見学。非常に多くのHIV/AIDS患者の診療に当たっている先生であり、服薬アドヒアランスを良くするための説明のTipや、カポジ肉腫や日本では殆ど診療することが無いCoccidioides症例等のAIDS疾患についての興味深い話が聞けた。

・UCSF at Mount ZionでHIV診療を行っている、今回のコースのProgram DirectorでもあるMitchell Feldman先生からのレクチャー。主に、医師患者間のコミュニケーションについて。行動変容に至るまでの患者の状態のそれぞれの定義付けと、それぞれのstageに対する効果的なapproachの仕方について。

・USCFのHiroyu HATAN0医師とのディスカッション。日本で経験したCMV腸炎発症のAIDS症例を基に、HIV診療を行っていくうえでの考え方のプロセスを中心に指導して頂いた。

その他の医師・コメディカル

・SFGHのGuy Vandenbergさんのレクチャー。1980年代前半からHIV/AIDS患者の診療に従事してこられた方。サンフランシスコのHIVの歴史、現状等。また、世界の3分の2のHIV感染者がいるにも関わらず、医療機関へのアクセスが難しいアフリカのHIV患者の支援活動を現在されている、とのことであった。その後、アメリカで最も古くからHIV診療を始めた病棟の一つであるWard86という病棟の見学。

・UCSFのCeryl Jay先生から、HIVと神経疾患についてのレクチャー。Neuro AIDSについての非常にまとまった話。

・SFGHのJohn Cello先生から、HIVと消化器疾患についてのレクチャー。AIDS Enteropathyとい

う疾患概念を教えてください。

- ・UCSFのKirsten Balanoさんから、抗HIV薬についてのレクチャー。症例提示から始まる双方向性のレクチャー。抗HIV薬についての特徴や注意点について。

LGBT、その他

- ・LGBT (Lesbian, Gay, Bisexuality and Transgender) の中心地、カストロ地区の見学。
- ・Shanti projectについて。元々は精神科医師が末期がん患者のために立ち上げたNPO。1980年代からはHIV患者も対象に。健康指導も行うが、利用者には何かを強制・要求するための場所ではなく「Be with you」がコンセプト。
- ・San Francisco AIDS OfficeにてサンフランシスコのHIVの統計・疫学について。
- ・HIV患者から直接話を聞く機会。その方はIDUにてHIV・HCV感染を起こした方であったが、治療も行いながら、薬物中毒者のcare managerの資格を取るために勉強中、とのことであった。
- ・LGBT centerのSNAP (San Francisco Newcomer's Assistance Program) について。SFはLGBTの方々の出入りの激しい場所である。その実態調査や啓発運動、Social Networking構築の手伝い等を行っている。

4 研修の成果・感想

1980年代前半の、病気の原因が何かすら分からない、又、現在のような抗HIV薬が利用できるようになる前の状況からHIV/AIDS患者の対応に当たっていた方々の話を直接聞くことができたのは、世界で最初のAIDS患者の報告のあった地域の一つであるサンフランシスコでの研修だからこそであり、とても興味深かった。差別や自分が病気にかかってしまうかもしれない状況の中で対応してこられたというのは、ただただ頭が下がる思いである。一方で、病気の原因が分かる前にある程度感染経路が予想されていたため、それほど心配でなかった、との話もまた真実であり、歴史を画一的に捉えていくことの危険性も自覚することが出来た。

今回のコースで一番強く感じたのは、HIV感染症を通じて見えてくる問題に、目を逸らさず真正面から取り組んでいかなければならない、というメッセージである。例えば、LGBT・IDU・Homelessの方々のHIV感染riskが高いことが知られている。そういった方のHIV診療を行いながらも、Drug abuseやHomeless等の問題は自分とは関係が無い、という意識がこれまではあった。そういった方の背景・社会状況を知ることや、どういったアプローチをしていくのが有効なのか、又、そういった方を対象にした啓発運動等の存在や重要性を認識することは、日本の診察室の中で働いているだけでは不可能であったと思われる。HIV感染症という疾患に付随する様々な問題。Sexualityや、経済、医師患者間関係、動脈硬化等の合併症のfollow、精神的なサポート等について、HIVを診療する医師としてどう関わっていくべきなのか。今後試されているのだと思った。

これまで当院からこのサンフランシスコ研修コースに参加したことのある医師・看護師がいなかったため、スケジュールのタイトル以外にどんな事をするのか殆ど分からない状況での参加であり出発前は少し不安な心境であった。しかし、その不安は速やかに払拭され、今回の研修は私にとって非常に有意義なものになった。それはコーディネーター兼通訳の小林まさみさんのお人柄、まさみさんを陰からサポートするDavidの尽力、英語の拙い私たちのために分かりやすく講義をして頂いたり、Home Partyまで開催して頂いた現地の方々のhospitality、年齢やspecialtyを問わず受け入れて頂いた日本から参加された各先生方の協力、サンフランシスコの素晴らしい景色と食事のおかげである。感謝。